

村田町文化財調査報告書第3集

坂下古墳調査報告書

昭和57年12月

村田町教育委員会

坂下古墳調査報告書

序

村田盆地の南に位置する薄木の地域は、宮城県史跡指定を受けた愛宕山古墳があり、その付近には、有数の古墳群が存在し、本町教育委員会は、文化財保護委員に数回の調査とパトロールを依頼、実施してきた。

その結果、遺跡の包含地からみて、地形及構築等の立地条件からみて除外されていた部分でもあつた。

しかし、地権者が宅地造成中、ブルドーザーで除々に削平していく間に、石棺が発見されたので工事は、一時中止された。

そこで教育委員会は、この古墳の保護について、関係者と協議の結果緊急発掘調査を行い記録保存にするため調査を実施いたし、その調査報告書がまとまり発刊のはこびとなりました。

この発掘調査報告書の刊行にあたりご尽力いただいた県文化財保護課調査第二係長平沢英二郎先生をはじめ、本町文化財保護委員佐々木安彦氏、本町ボランティアサークル諸君、ならびに調査協力者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和58年3月

村田町教育委員会教育長

森 良一

目 次

1. 調査に至る経過	(2)
2. 遺跡の位置と環境	(3)
3. 調査概要	(3)
4. 遺構と出土遺物	(6)
5. まとめ	(9)
写真	(11)

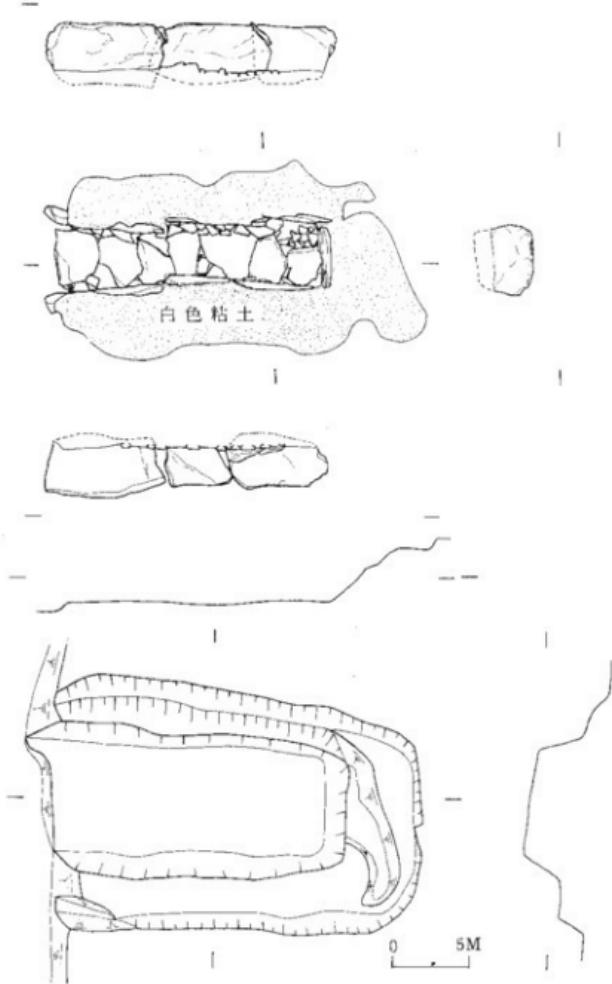
例 言

1. 所 在 地 宮城県柴田郡村田町大字薄木字坂下 8-1
2. 遺 跡 名 坂下古墳 第2号墳
3. 調査月日 昭和57年7月24日～10月30日
4. 調査主体者 村田町教育委員会
5. 調査担当者 村田町文化財保護委員・日本考古学会員 佐々木安彦 (執筆担当)
6. 調査協力 村田町教育委員会 大沼 忠 高橋徳夫
補助員 安部由美
協力者 佐藤信一 村田町ボランティアサークル
鈴木産業
作業員 高橋賛次 佐藤雅之 関 智子 村上正利 大沼啓治
山城秀一 大内 豊 水戸淑子 小川光則 佐藤友子
真壁正己 沼田美樹 大沼晃一 今野 明 高橋育美
佐藤誠紀 大沼恵美子 安西喜恵子 村上八寿子
7. 調査面積 約400 m²
8. 発掘面積 約380 m²
9. この調査について地権者の布田俊一氏の多大の御協力をいただいたことに感謝します。
10. 本書の作成にあたっては、宮城県文化財保護課・平沢英二郎氏の協力を得た。
11. 本古墳出土遺物は、村田町教育委員会において保管している。

1. 調査に至る経過

坂下古墳は柴田郡村田町大字薄木字坂下8-1番地内、布田俊一氏所有地にある。

昭和55年5月上旬土地造成のために丘陵東斜面をブルドーザーで整地作業中に扁平な石が数枚発見されたが石棺とは知らずに作業を進めていたが、5月10日に石組の一部である東側の側石1枚が露出した。何んであるか探ろうとし、さら蓋石を動かし、中をみたら箱のような石組がみつかり、内部には何もなかった。そして町教育委員会に通報した。町教委ではさっそく現場を確認し、古墳の内部にある箱式石棺であることが判明した。さらに地権者である布田俊一氏に文化財の保護を訴え、これ以上土地造成を行なわないように理解と協力を求めた。これに対し布田氏は理解を示し、協議したが、その状況より現状のまま、又は移転して保存することがむずかしいと判断し、記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。その間調査を実施するまで土地造成を延期することになった。そして昭和55年8月2日～8月14日にかけて町教委が調査主体となり実施された。発掘調査面積は約600m²である。その結果、第1図に示したようにほぼ東西に長さ約1.9m、巾0.4mの箱式石棺が発見された。箱式石棺は、発見当初の話などにより、わずかな高まりをもっていたことが推定された。また扁平な石が側にも数枚見つかっており、開塗した古墳以外にももう一基の存在が推定された。これらの石棺の材質は表面は褐色であるが、破損箇所をみると青色を帯びた玄武岩質安山岩で板状にわれる性質を利用し、長方形に整形して組み合せをしたものである。また発見されたときに動かされた東側の側石と蓋石も同様の切り岩を使用している。土圧によって側壁はやや内側に傾斜していた。側壁は北側の中央で二重になっているところがみられた。側壁の南側は3枚、北側も3枚の3～8cmの厚さの切り石で組み合わせられていた。西側奥壁は1枚の切り石を使用している。底石は厚さ4～6cmの切り石を使用していた。その縫ぎ目には5～10cm前後の切り石の破片と思われる石を使用している。古墳はわずかに残存するセクションから旧表土の上に堆積土して埴丘をつくったと考えられた。しかし、石棺の構築は旧表土をはりさげ、さらに地山の明褐色土のローム層を約56cmはりさげ、地山の土を平らになるよう底石に敷き、さらに底石を西側からならべ、次に東西の奥壁を2枚立てる。その後側石を西側から立て白色粘土を周囲につめこみ、空隙がないようにし、蓋石をし、最後に周囲を空隙のないように白色粘土をつめてつくったと考えられ、非常に丁寧なつくり方をしていることがわかった。周溝はなく、出土遺物は周辺のわずかに残った堆積土中から弥生式土器（円田式など）の小破片が出土している。また須恵器破片が2片出土しているが、同一個体の壺の破片と考えられる。これがこの石棺と関連があるか不明である。この古墳を調査にあたって新たに発見された古墳であるため、古墳所在地の小字名をとり、坂下古墳とした。ところが調査中に約20m南側のところに高さ約1.2m、径10m前後の古



第1図 坂下古墳第1号墳石棺および堀り方実測図

墳が発見され、さらに南側約50m丘陵に円墳と方墳の2基が尾根上にあり、20m前後の大きさのものが発見された。そのため、発見された順に番号を付し、前回調査した古墳を第1号墳とした。今回、第2号墳に宅地造成の主旨の要望が地権者から出され、協議をかねたが、現状保存が難かしく記録保存することになり、文化財保存事業費補助金交付を受けて、宅地造成とともに緊急発掘調査が昭和57年7月24日～8月31日まで実施された。

2. 遺跡の位置と環境

この古墳は村田町の町内の南西約2kmの地点にあり、村田盆地の南西に位置している。村田盆地は西の奥羽山脈と東の高館丘陵にはさまれた南北に長い盆地である。奥羽山脈側からは幾条もの丘陵がこの盆地に延びてきているが、この低い丘陵となっている地点に古墳は造られたものである。

この盆地をとりまく周囲の丘陵上や台地上には遺跡が多く所在している。今回調査した坂下古墳を含め確認されている遺跡は120ヶ所をこえている。その中で古墳時代のものとして、集落跡1ヶ所、遺物包含地7ヶ所、古墳26ヶ所の遺跡が確認されている。古墳としては高塚古墳(20)と横穴古墳(5)がある。前方後円墳には愛宕山古墳(県指定)、千塚山古墳、金原権現山古墳がある。前者の2基は後円部が高く、後者は東側の前方部と後円部の中間に突起部をもつ特徴がある。さらに愛宕山古墳、下の内附古墳からは円筒埴輪が発見されている。横穴古墳では、中山横穴古墳群からは金銅製の円頭大刀や勾玉などが出土している。また龍泉院横穴古墳からは長頭瓶や刀子などが出土している。住居跡としては日向遺跡がある。

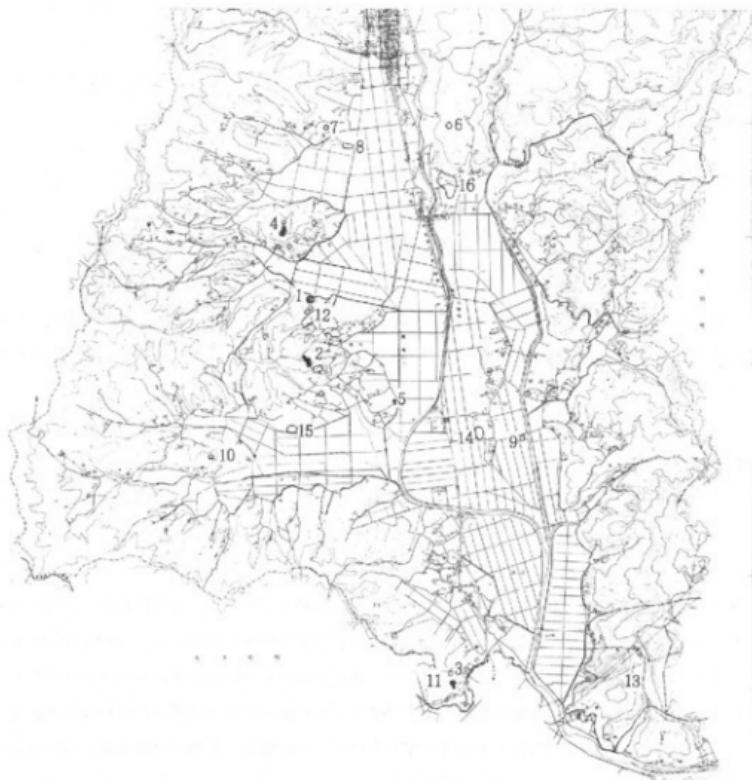
今回発掘した古墳は愛宕山古墳の東北の同丘陵上に位置している。

3. 調査概要

今回調査の対象になった2号墳は雑木林となっており、伐採作業から始められた。また2号墳と1号墳が存在した周辺の古墳を含めた1/500の地形図を作成した。

発掘調査をはじめるにあたって、古墳の中心と考えられるところに中心杭を打った。そして北方向を基準に1～4区としてグリット名を付した。

今回の調査は2号墳を全面発掘することとし、次のような方法で実施した。古墳の中心杭を通る十字の基準に沿ってベルトを残し、四分法による発掘を実施した。十字のベルトは、古墳の構築にあたってどのように土が積まれているのかを観察するためのものである。



第2図 坂下古墳の位置と周辺の古墳

- | | |
|------------------------------------|----------------------------|
| 1. 坂下古墳（円墳，方墳） | 9. 小塚古墳（前方後円墳） |
| 2. 愛宕山古墳（県指定前方後円墳）
栗師堂古墳（“ “ “） | 10. 二渡権現古墳（円墳） |
| 3. 浅間神社古墳（前方後円墳） | 11. 千塚山古墳（円墳） |
| 4. 方傾権現古墳（前方後円墳） | 12. 藏本古墳群（円墳，箱式石棺） |
| 5. 雲南古墳（前方後円墳） | 13. 上ノ山, 長庭山古墳群（円墳, 槍穴式石室） |
| 6. 下内圓古墳（前方後円墳？） | 14. 中山圓横穴古墳群 |
| 7. 針生A古墳（円墳） | 15. 稲崎横穴古墳群 |
| 8. 針生古墳（前方後円墳？） | 16. 古館横穴古墳群 |

発掘調査は木根を取り除くためにユンボをかりあげ、抜根作業から始まった。さらに表土を除去した。

発掘調査は昭和57年7月24日より開始され、10月30日で終了した。その結果、径約8.9m、高さ約1mの積み土をもつ古墳と考えられた。

古墳については1/20の断面図を作成した。

4. 遺跡と出土遺物

墳丘の中央部から東西を基準に沿って十字のベルトを残し、四分法による発掘を実施した。十字のベルトは古墳の構築にあたってどのように土が積まれているかを観察するためのものである。

十字のベルトをのこし、表土から掘り下げた。その結果、第2号墳は1日表土および地山を削り出して古墳の基底部とし、その上に土を盛っている古墳である。

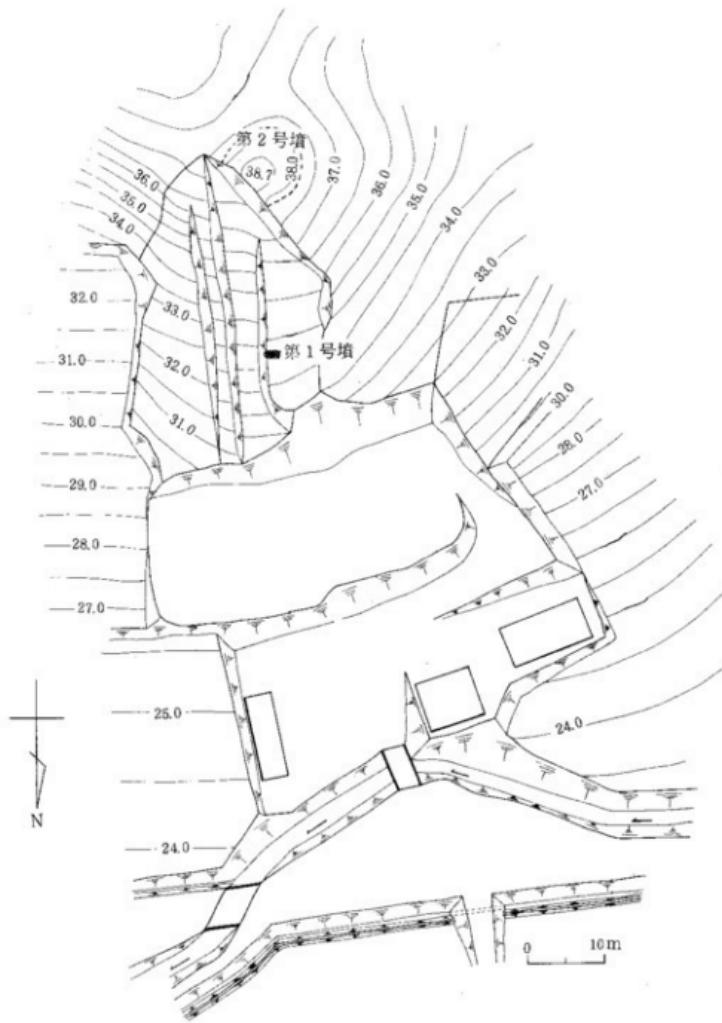
古墳の東側は、土地造成の際、一部破壊されていたが、古墳の規模および平面形で、東西9.2×南北8.9m、高さ約1mのはば円形の古墳であることが考えられた。

土層は大別すると2層にわけることができる。第1層：暗褐色土（表土）、第2層：褐色土層（積み土）である（第4図）。積み土は2層から10層まである。2層は北側の一部にみられのみである。3層は南と北側の一部に、4層は北西側にのみに分布している。5層は西側にわずかにみられる。また9・10層は古墳の中央部から東側にかけて厚さ10～30cmでほぼ水平に盛られていた。また前回発掘調査した第1号墳のように地山に掘り込んで石棺が埋葬されていることも考え、地山：明褐色土を約1m掘り下げた。その結果、古墳の内部施設らしい痕跡もなく、出土遺物もなかった。また周溝もない。

出土遺物は古墳をつくったとき動かされた土、つまり積み土の中から土器破片数十点と石礫と磨石が出土している。（写真12）

土器：小破片で磨滅しているのが多い。1～3は鉢（高杯？）、壺形土器の口縁部の破片であり、4は肩部の破片である。外面に沈線により文様を構成している。沈線文による文様は一本工具で描かれ、調整はミガキである。内面の調整はナデ、ミガキである。

5～10は壺形土器の破片である。5～9は体部破片で、外面に単節繩文（L R）、付加繩文（L R+R）が施文されている。内面の調整はミガキである。10は体部から底部にかけての破片で体部外面に付加繩文（L R+R）が施文され、底部外面に布状痕がみとめられ、内面の調整はミガキ、ナデである。



第3図 坂下古墳実測図（第1，2号墳）

1.暗褐色土	粘土質シルト	(表土)	6.暗褐色土	シルト	11.明褐色土	シルト
2.褐色土	粘土質シルト	粘土ブロック混入	7.褐色土	粘土質シルト	12.明褐色土	砂質粘土
3.褐色土	粘土質シルト	暗褐色土粒混入	8.褐色土	シルト質粘土	13.明褐色土	粘土 砂
4.暗褐色土	砂質シルト	砂粒混入	9.褐色土	粘土質シルト	14.明褐色土	炭化物、砂が多く混入
5.黒褐色土	シルト		10.褐色土	砂質シルト	15.深褐色土	炭化物、砂が多く混入

(地
山
人)

(地
山
人)

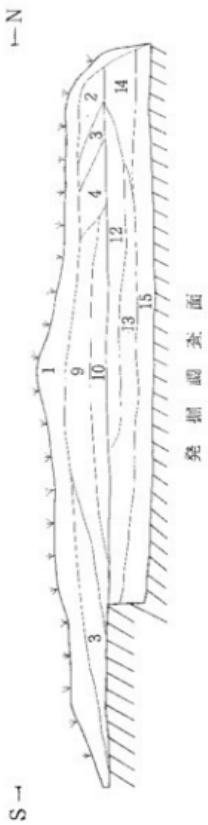
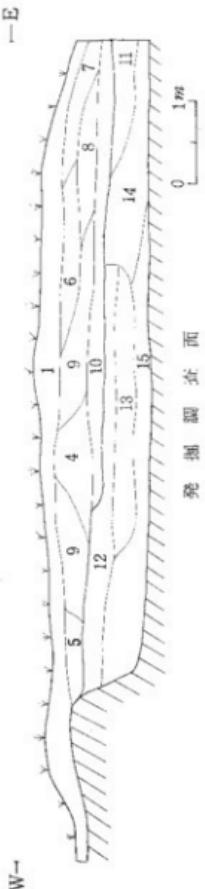
褐色土粘土質シルトがブロック
状に混入し、やわらかく、
砂粒混入

砂質粘土
砂粒が多いため
砂がブロック状に混入

粘土
砂

炭化物、砂が多く混入

第4図 発掘調査セクション図



これらの資料について研究成果と比較すると藏王町大橋遺跡、同町欠遺跡、村田町北沢遺跡、同町中ノ内遺跡出土のものに類似している。これらの編年的位置づけはいずれも「円田式」とされている。よってすべて「円田式」の範疇に含められると考えたい。

石製品：11は打製石器の先の方の破片である。大きさは9.2×7.7cmである。

12はほぼ円形の磨石の破片で径9cmの大きさの河原石を利用し、縁辺部に磨ってできた痕がみられる。

5. ま と め

- (1) 第2号墳は大きさは長径92m、短径89m、高さ1mほどのほぼ円形の円墳と考えられる。
- (2) 第1号墳とは墳丘の構築方法が違い、旧表土を取り除き、地山面をほぼ平坦な状態にしてから積み上（盛土）をしていることが確認された。
- (3) 造営の時期については、1号墳の石棺や沼迎村史に出土がみられる石棺は、白石市鷹ノ巣古墳群、藏王町明神裏古墳群などでも同様の埋葬施設として残存していた箱式石棺から考え、6世紀初頭に位置づけられるものと考えられる。しかし今回発掘調査した2号墳は内部の埋葬施設や古墳にともなう出土遺物がなく不明である。また木棺直葬の場合や前回土地造成したときに1号墳の石棺と他にもう一基分の石棺ぐらいの板状の石が出土していることから、開窓等により墳丘上部が削平されることによって発見ができなかったことも考えられ、さらに今後の研究成果をまち、検討したい。
- (4) 村田盆地のほぼ中央部に位置する県指定の愛宕山古墳のある丘陵にはもっと古墳群の存在が考えられる。その中には古く沼迎村史によって記載されている箱式石棺を出土している藏本古墳のあった地域とは丘陵境を接して本古墳があり、前回発掘調査した1号墳と今回発掘調査した2号墳、踏査した3・4墳を含め、坂下古墳と名づけたがどの古墳群に所属させるのが最も適当であるか今後検討する必要であろう。

<引用・参考文献>

- 藤沼邦彦(1971)：「大橋遺跡」宮城県文化財調査報告書第24集
- 白鳥良一(1971)：「欠遺跡」
“
- 斎藤吉弘(1978)：「北沢遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第56集
- 真山悟(1978)：「北沢遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第56集
- 佐々木安彦(1979)：「宮城県柴田郡村田町中の内遺跡について」『類』創刊号
- 白石市史編さん委員(1976)：「白石市史」別巻
- 沼辺村(1954)：「沼辺村史」
- 村田町編さん委員(1977)：「村田町史」
- 斎藤良治(1976)：「車丁古墳調査報告書」白石市文化財調査報告書第10集
- 志間泰治(1961)：「宮城県蔵王町明神裏古墳」日本考古学年報9
- 志間泰治(1972)：「白石鷹ノ巣古墳群発掘調査概報」白石市文化財報告書第11号
- 伊東信雄(1967)：「鷹ノ巣古墳群(第1号・第13号)緊急発掘調査報告書」白石市文化財調査報告書第6号
- 伊藤玄三他

写 真 版

[写真1]

遠 景



[写真2]

遠 景

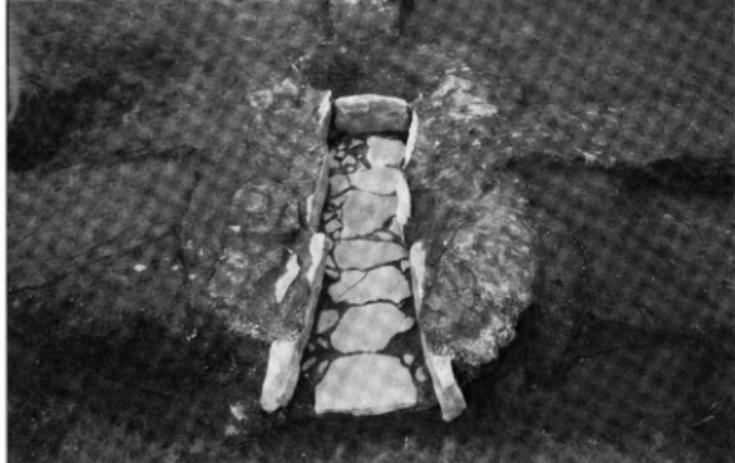
中央上に県指定文化財愛宕山古墳がある



[写真3]

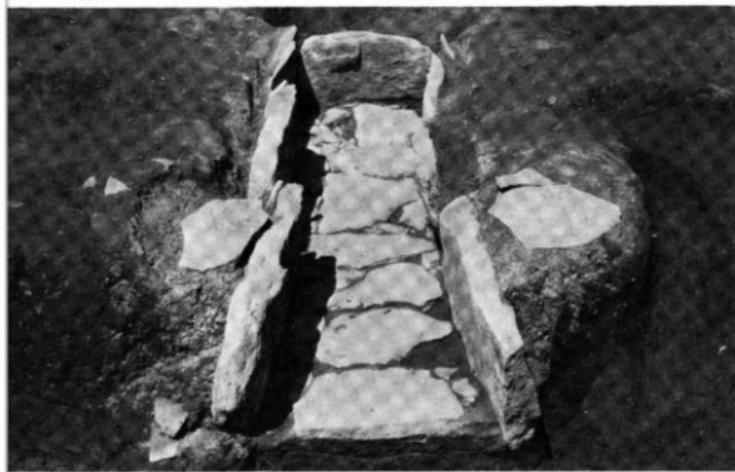
近 景





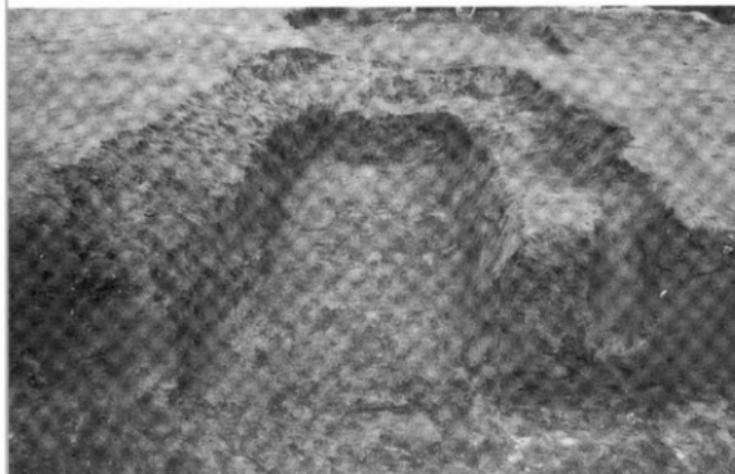
[写真4]

第1号墳 石箱



[写真5]

第1号墳石箱の上
の白色粘土をとり
のぞいたところ



[写真6]

第1号墳石箱の
掘り方

[写真7]

第2号墳発掘前の
ようす、西側から



[写真8]

第2号墳
東西セクション



[写真9]

第2号墳
南北セクション





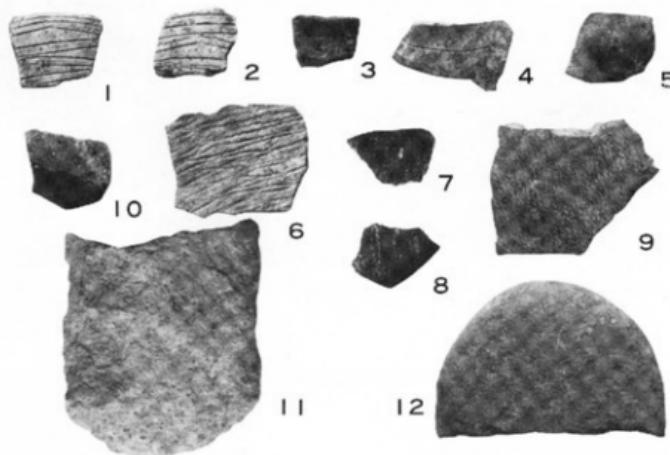
[写真10]

第2号墳
発掘区終了写真



[写真11]

第2号墳
発掘風景



[写真12]

第2号墳
堆積土中出土遺物

**村田町文化財調査報告書第3集
坂下古墳調査報告書**

昭和58年3月1日 印刷
昭和58年3月20日 発行

発行 村田町教育委員会
柴田郡村田町大字村田字追6 TEL 2111
印刷 有限会社津写植印刷
柴田郡大河原町字東原町13-5 TEL 2-5550

